

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

収穫後におけるナシ黒星病の防除対策の徹底について

ナシ黒星病菌は圃場内に残る落葉や芽基部の鱗片で越冬し、翌年の伝染源となるため、収穫後の防除対策が重要です。

については、下記事項を参考に防除対策を徹底するよう生産者への指導をお願いします。

記

<防除対策>

ナシの生育期における防除については、スコア顆粒水和剤やアンビルフロアブル等のDMI剤が散布されているが、防除効果が低い事例が認められている(表1参照)。このことから、本病菌のDMI剤に対する感受性は低下傾向と考えられるため、秋期には、「DMI剤以外の薬剤の散布」や「落葉の処分」等を組み合わせた防除対策を実施する。

1. 秋期の薬剤防除

本病菌が感染した芽基部の鱗片は、翌年の伝染源となる。秋期の薬剤散布は翌年の黒星病の発病抑制に有効である(2013年熊本県農業研究センター果樹研究所、図1参照)。そのため、鱗片生組織(写真1)が露出し、本病に感染しやすくなる10月~11月中旬にデランフロアブル、オーソサイド水和剤80等を2~3回散布する



写真1 鱗片生組織が露出した芽

2. 収穫後の落葉の処分

園内に放置された落葉(写真2)は、本病の翌年の伝染源となるので、土中にすき込むか、落葉を集め、園外で処分する。



写真2 翌年の伝染源となる
ナシの落葉

3. 伝染源となる枝やぼけ芽の剪除

伝染源となるため、二次伸長した枝、ぼけ芽は必ず剪除する。

4. その他

防除の詳細については「平成28年度 施肥・病害虫防除・雑草防除のてびき <水稲・大豆・果樹・茶> (P282~285)」を参照する(11月中旬に新版に更新予定)。

<参考資料>

表1 佐賀県内から採取したナシ黒星病菌に対するDMI剤の効果(佐賀県果樹試験場、2013年)

供試薬剤	希釈倍数	発病度(葉) ^{a)}			発病抑制効果		
		圃場A	B	C	圃場A	B	C
スコア顆粒水和剤	4,000倍	0.2	5.8	0.0	99.7	85.2	100
アンビルフロアブル	1,000倍	5.9	20.8	0.9	90.9	47.1	98.4
インダーフロアブル	8,000倍	41.2	25.7	2.1	36.7	34.6	96.2
無散布	-	65.0	39.4	55.5	-	-	-

注)2013年10月3日に‘幸水’1年生鉢苗に供試薬剤を散布し、24時間後(10/4)と48時間後(10/5)の計2回、県内3ヶ所の圃場A,B,Cの罹病葉から採取したナシ黒星病菌の孢子懸濁液を噴霧接種。10月24に供試薬剤を再散布した。接種35日後(11/7)に、菌接種時の最上位葉を中心とした上下合計10葉/新梢について程度別に発病を調査し発病度を算出した。

a)無(0):病斑なし、少(1):病斑1個、中(3):病斑2~3個、または、それ相当の大きな病斑が1個
甚(5):病斑が4個以上、またはそれ相当の大きな病斑が2個以上

$$\text{発病度} = \frac{\sum(\text{指数} \times \text{程度別発病葉数})}{5 \times \text{調査葉数}} \times 100$$

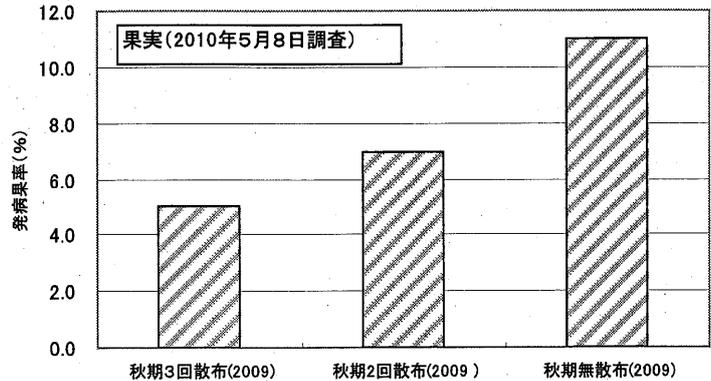
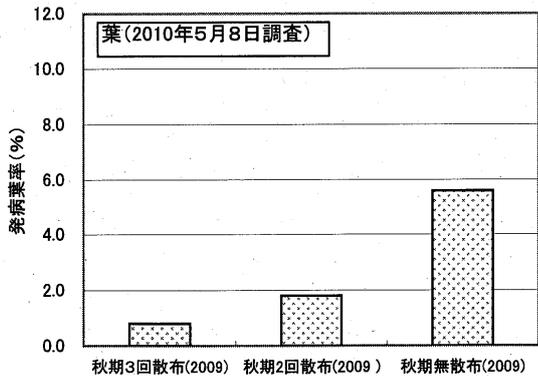


図1 秋期の薬剤散布が翌年の葉・果実におけるナシ黒星病の発病に及ぼす影響
(熊本県農業研究センター果樹研究所 農業研究成果情報、2013年)
※9月~11月にキャプタン水和剤1,000倍を2~3回散布。

熊本県農業研究センター果樹研究所 農業研究成果情報

「https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=1033&sub_id=1&flid=42&dan_id=1」

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085